

原作をそのまま起こした版

セクシー田中さん 原作 芦原妃名子

#1 幸せになりたいわけじゃない

起こした人 大岡俊彦

登場人物

倉橋朱里（23） 見た目ゆるふわ女子、腹は現実的な派遣OL。

田中さん（40） 地味なメガネの経理さん。背が高くすらりとしている。だがその正体は、ベリーダンサーSATI。

進吾（23） 朱里の家に泊まりに来るが手を出さない、変な関係の男。

笙野（36） 堅物で遊んでる女が嫌いな都銀の男。

小西（36） 笙野の友人。広告マンでチャライ。

三好（50） 中東料理レストラン「サバラ」のマスター。イケオジ。

その他エキストラ

○会社の廊下を歩く田中さんの背中

朱里NA【絶対、何かやってる】

○しやれたイタリアン

会社員同士の合コン。

スーツ男子4、カジュアルおしやれ女子4。

朱里(25)「えー、何コレ。心理テスト？」

男子A「いーからいーから」

ペンと8枚の付箋大の紙を渡す。

男子A「8枚の紙に、結婚相手に望む条件一つずつ書いて！」

朱里「えーっ。8コも？」

女子A「あ。コレ知ってる！ 究極の二択ですーって一枚ずつ絞って行って、ラストに残った一枚が、唯一あなたの『絶対的な譲れない結婚相手の条件』ってやつでしょ」

たとえばの紙の例。  
「食の好みが同じ人」「年収600万以上」「家事に協力的」「笑いのツボが一緒！」

最後に残った紙、「絶対浮気しない人！」

女子B「朱里ちゃんは何？」

考える朱里。

女子C「書けた？」

朱里「えー、8個もないよー」

男子B「深く考えなくたっていーんだって！」

男子C「パッと浮かんだのをササッとてきとーに」

朱里「うーん……」

書き入れた結果の紙。

「家族を大切にしている人」「優しくて思いやりがある人」「子供好きの人」「食べ物の好みが同じ人」「犬が好きなお人」「私が作ったご飯を沢山おい

しそうに食べてくれる人」「お仕事を一生懸命がんばってる人」「笑顔がステキな人」

男子たち「かわえーっ」

男子D「『優しい人』って抽象的すぎねえ？」

男子A「朱里ちゃんまだ23だもんなー。結婚とか全然リアルじゃないでしょ」

女子たちはそのぶりっ子ぎみに引いている。

男子B「経験値足りてないんだって！」

困った笑顔の朱里。ふわふわ系。

朱里NA【男性陣のいる前で、本音なんか書くわけがない】

○夜、朱里のアパート外観

女子っぽいこじやれた感じ。

○同、朱里の部屋、ベッドの上

朱里「条件かー。うーん、ダメだ」

たくさん書き出された紙。

「40歳以下」「犯罪履歴ナシ」「変な宗教入ってない人」「不潔すぎない人」

「最低年収300万」「できれば性癖ノーマル」な「大きな持病がない人」

「精神的にも物理的にも最低限自立している人」「気軽に借金しない人」

「モテ過ぎない人」

朱里NA【そこそこの年収。そこそこのコミユ力。そこそこのサバイバルスキル。ビジュアルは生理的に無理なレベルじゃなければハゲでもデブでも気にしない】

さらに続く紙。

「大家族NG」「暴力ムリ」「ギャンブルしない人」「働いてる人」「うかつに起業とかしない人」

朱里NA【子供は一人、多くても絶対二人まで。DV借金ギャンブルあり得ない。『普

通』でいい。その『普通』が難しいのはわかってるけど『普通』がいい】

紙の一枚を取り上げる朱里。

朱里 N A 【二人で働いてなんとか協力してやっつけていけるだけの、『普通』で堅実な人がいい】

その紙にあるのは、

「夢とか語って暴走しない人」。

朱里 N A 【幸せになりたいわけじゃない】

○東京、会社、外観

朱里 N A 【サイアク、不幸にならないだけのリスクヘッジがしたいだけ】

○同、女子更衣室

先輩 O L たちに囲まれる朱里。

先輩 A 「えーっ。現実的だなあ。最近の若い子って皆そんな感じ？ 倉橋さんまだ23でしょー。若くてかわいんだからもっとハイスペック男子狙えるって！」

朱里 「(営業スマイルで) 全然そんなことないですよー」

先輩 A 「(先輩 B に) あれ？ 新作？ いいなー」

先輩 B は高そうなハンドバッグを持っている。そのアップ。

先輩 B 「ちよっと無理して買った。」

(爪を見て) ネイルサロン変えたでしょ」

先輩 A 「うん。前に行ってたところ。持ちが悪くてさー」

先輩たちから逃げるように、朱里たちと同期たちは退散。

○同、女子トイレ内

でメイクしている朱里と同期女子。

同期 A 「うちの会社の独身アラフォーってさ、二極化してるよね」

イメージ。  
ハイスぺ男子と夜の繁華街でデートする、オシャレアラフォー。髪は茶髪で美容院行っている。  
周りに高い化粧品やバッグやヒールのイメージが浮いている。  
同期A「老化に負けじと自分磨きエスカレーターする系と」

イメージ。  
地味な制服のおばさん（メガネで黒髪短髪）が、社内の席でランチ弁当を食べている。

周りに自炊弁当、貯金通帳、お一人様向けマンションのチラシのイメージ。  
同期A「すっかり諦めて老後資金貯め始める系」

同期B「どっちも無理」  
同期A「わかるー。みじめだもん」

それを冷めた目で見ている朱里。  
朱里NA「自分なりに就活頑張ってはみたけど、派遣OLにしかなれなかった」  
イメージ。

暗闇で給与明細を見て落ち込む朱里。  
朱里NA「初めてもらった給与明細を見た時に、一生独りでは生き抜いていけないと思った」  
イメージ。

合コンの紙。「働いてる人」「最低年収300万」

朱里NA『普通』にしがみついている、少しでも安定した足場がほしい」

同期C「じゃあ田中さんは？」

同期A「え……っ。あの、田中さん？」

同期C「どっち系？ すっかり諦めてる系？」

同期A「あ……田中さんって今いくつだっけ？」

同期C「野口さん達と同期でしょ？ 40じゃない？」

同期A「どっち系も何も……。諦めるも何も、

元々スタート地点にすら立ってないじゃん、田中さんは」

話しながら廊下に出てくる女子たち。

廊下の向こうから書類を持った田中さん（40）が歩いてくる。

朱里、田中さんに気づく。

地味でメガネ、ロングヘアだが黒髪でただひつつめに髪にした、ただ背の高い女。

朱里 N A 【あ。田中さん……】

同期 A 「（彼女に気づかず、話を続ける） 粹

外、論外、元々『普通』じゃない」

田中さん、聞こえているのか無視しているのか、通り過ぎる。

朱里、彼女の何かに気づく。

伸びた背筋。鍛え上げられたふくらはぎ。引き締まったボディライン。

（冒頭のシーンに重なる）

○夜、焼き鳥屋

朱里 「……絶対、何かやってると思うんだよねあー」

カウンターでビールと焼き鳥で庶民的な食事をしている、朱里と進吾（23）。

進吾 「？ また朱里んとこの会社の経理の

田中さんの話？ おまえ好きだなー田中ウオッチング」

朱里 「いや！ だってさー。田中さんてさ、前はもつと『いかにも！』って感じの人だったんだよ」

× × ×  
回想。経理でぶつぶつ言いながら書類の整理をする田中さん。背筋を丸めたまま。

朱里 「地味で老けて暗くて猫背でさー。なんかよく一人でブツブツブツブツ言ってるし……。なまじ経理の仕事は A I 並みに

できるから余計うすら恐ろしいっつーか人外ぼくて」

進吾 「ひでーな。女子こえー」

朱里 「ごめんなさい。いやでもほんとに。

それがさ！」

と、腰に手をやり、

朱里 「最近になってこう！ 体のラインが

一気に！ グイッ！と！」

進吾 「ほんと他人のスタイル舐めるように

チェックしてるよね。朱里子供体型だもん

なー。着痩せしてっけど、腹まわりすぐポ

ニョる」

朱里 「うるさい」

焼き鳥の余りを彼女に出して。

進吾 「食えって」

朱里 「……もういい。太るから」

進吾 「食え」

朱里 「やーだー」

進吾 「オレもう食えねーもん」

○店の外

店員の声 「ありがとうございますー」

外はすっかり寒い。

進吾 「今日朱里ん家泊まっていい？」

朱里 「はあ？ またあー？」

進吾 「明日朝から支店回りなの。朱里ん家

近くて便利だもん」

朱里 「……」

進吾 「いーじゃん。今男いないでしょ」

朱里 「……」

進吾 「誓って、指一本触れないし」

○夜、朱里のアパート

○同、部屋

風呂上りにタオルで頭を拭きながら。

進吾 「朱里ーっ。オレのタオルは？ 青いやつ」

朱里 「進吾のじゃないけどね」

ソファにそのタオルを畳んで枕替わりにする進吾。

進吾 「オレこのタオルじゃないと安眠できないんだよね」

朱里 「……（イラッと来る）」

進吾 「おやすみ」

朱里 「……電気消すよ」

進吾 「ういー」

朱里、電気消す。

ベッドで眠る朱里、ソファで寝る進吾。

眠る進吾の横顔。

朱里 N A 【進吾は、学生時代からの、ただの『友達』です】

眠りに落ちようとする朱里のスマホが明るくなる。ラインが来た。

ライン 「明日の夜空いてない？」

それを見る朱里。

ライン 「合コン一人欠けちゃって」

ライン 「ちよい年齢層高いけどー。一応全員

40歳以下！」

朱里、期待しないで返事。

ライン 「行く！！」

○朝、朱里のアパート、外観

○同、部屋

壁にかけられる、かっちり系の服とゆるふわ系の服。

朱里 「うーん……」

朱里 N A 【全方位受けはこっちなんだけどなあー。でも弱いかなー】

ラインの画面。

ライン 「ちよい年齢層高いけどー。一応全員40歳以下！」

朱里 N A 【オジさんが年下狙いに来るわけだしなー。若さ押しで行ったほうが展開速いかなー】

ゆるふわ系の服を手取る。

進吾 「あれ？」

台所で朝飯を漁っている進吾。

朱里の露出高めゆわゆるふわ服を着ているのを見て。

進吾 「……今日何かあんの？ 飲み？」

朱里 「うん。ちよつと」

進吾 「……スカート短くね？」

朱里 「いーの！」

進吾 「ふーん（探り当てたお菓子をもぐもぐ）」

朱里 N A 「こんな中途ハンパな生き物、飼つてる場合じゃない。いつまでも、若くないんだし」

○夜、テラスのあるおしゃれレストラン

○同、合コン席

小西（36） 「えーっ！ マジで皆23なのー？ ヤベーツオレら皆超オッサンじゃん！」

女子 A 「えー全然30過ぎには見えないですよー若い」

小西 「一番年食ってんのはねーこいつ！」

チャラ目の小西が、堅物の笙野（3

6）の肩を抱きながら紹介する。

小西 「笙野浩介！」

あまり興味のない顔で見ている朱里。名刺を見る。

名刺 「光友銀行 笙野浩介」

朱里 N A 「都銀……手堅いな」

小西 「こいつ結婚願望強くてさー。誰かもらってやってよー」

朱里 「（営業スマイルで）おいくつなんですか？」

笙野 「……36」

朱里 「えーみえなあーい」

興味なさそうに飲む笙野を、品定めする朱里。

朱里 N A 「ちよつと高物件すぎるかなあ。都

銀って結構結婚早いよね？ 結婚願望アリ、顔も悪くないのに36独身で、ちよつと地雷集するけどな。でも都銀！ そうそう破綻しないよね！」

朱里 「えーうそー（適当に話を合わせている）」

朱里 NA 「ヤバくなったら公的資金投入するんだっけ？ 13歳上か。このくらい年齢差あつたほうが重宝してもらえていのかも」

キヤツキヤと媚びを売っている朱里を見て、内心苛立っている笙野。

笙野 「（席を立って）トイレ」

○同、トイレ前

同様にトイレに行くふりをして来た朱里、小西と笙野の喧嘩を目撃。

小西 「（笙野の腕を引いて）急に帰ったら女の子達変に思うだろーっ！」

笙野 「おまえ……マジメでちゃんとした女子紹介するって言わなかったっけ？」

小西 「23！」

笙野 「だからなんだよ。オレは将来を見据えたマジメな恋愛がしたいんだよ」

二人は朱里に気づいていない。

朱里 「……」

笙野 「絶対遊んでるだろ。アイツら全員。

ネイル盛って、短けースカートはいて、媚びまくって男つかまえることしか頭になさそうじゃん」

朱里、短いスカートをぎゅっと握る。

小西 「合コンってそーゆーイベントだろーっ！」

笙野 「帰る」

小西 「笙野ー！」

脇に抱えた上着を振り払かった際、笙野の胸ポケットからボールペンが落ちる。

自動ドアから出ていく笙野。

小西 「ったくもー……」

小西、ボールペンに気づかずに行ってしまう。

朱里、そのボールペンを拾う。  
結構値段しそうなもの。

○合コンの席

女子A 「えーっ。笙野さん帰っちゃたんですかあー？」

小西 「いやーごめんねー！　なんか急に仕事入っちゃったとかで」  
ただ残りの酒を飲むだけになった朱里。

○帰り道

小西 「朱里ちゃん！」

スマホのライン画面を見せる。

朱里、スマホを出す。

小西 「えっ、いいのライン？　ほんとに？」

うれしそうな小西。朱里、無表情から少し血の通った顔に。

○後日、中東レストラン「サバラン」内

女子たちでエキゾチックな料理を楽しんでいる。

スマホの画面を眺める朱里。

小西のライン「朱里ちゃんめっちゃ可愛いなーって思いました！」「もしよかったら

今度二人で飲みに行きませんか？　ランチ

でもいいし（顔文字）」

同期C 「何？　こないだの合コンの人？」

朱里 「うん」

同期A 「小西ってこ人だっけ？　めっちゃ気に入ってたよね、朱里のこと」

朱里 「どーかなー。広告マンだしな」

ふと思い出す笙野のぶっきらぼうな顔。  
朱里NA「それに、あの人の友達なんだよな

あー】

ボールペンの回想。

朱里NA【あのボールペン……ヤフオクで売り飛ばしてしまいたい……】

同期B「あコレうまー！」

料理の一つを食べて驚く。

ペルシャ料理がテーブルに広がっている。

同期A「『フムス』って何料理？」

同期B「知らない」

同期C「トルコじゃない？」

同期A「でもこの店『ペルシャ料理』って書いてあったよ。食べログに」

同期B「ペルシャってどこの国？」

同期A「へ？ ペルシャはペルシャでしょ」

三好（50）「ペルシャは今の『イラン』だよ」

と、カウンターから話しかける。渋いイケオジだ。

同期B「あーそうなんですかあー」

三好「『フムス』はトルコとかギリシャ、

レバノン、イラクとか、中東の伝統料理」

同期B「へー」

と、デザートのお菓子を出してくれる三好。

三好「みんなかわいいーねー。これサービース」

同期A「あ、もう帰るんで、すいませーん」

同期B「飲みすぎたー」

同期A「ヤバイあたし明日早いんだけど」

三好「もうちよつとだけゆっくりしてきなよ」

ステージを指さす。

三好「ちようど、ショーが始まる」

スポットライトの中に現れる中東のダンスー。エキゾチックな音楽。

その露出の多いエロティックな恰好に驚く朱里たち。

ダンスが始まる。

情熱的でエロティックなダンス。肉感

的で、乳房や腰回りを強調する。

朱里 「えーっ何ーっ。おっぱいすごいっ。めっちゃ揺れてんだけど！」

男子の客の前でおっぱいをぶるんぶるん震わせるダンサー。拍手する男子たち。

同期B 「ムツチムチ！」

あっけにとられる女子たち。

三好 「豊満で肉感的がセクシーってのがむこうの価値観」

朱里 「ベリーダンス？」

三好 「そう。元々是中東の民族舞踊なんだけど……まあ現地の扱いとしては娼婦の踊りかな」

肉感的で豊満な踊り。

朱里 「ふーん……」

朱里NA 【娼婦……】

朱里 「(独り言) はしたない」

笙野 「(回想) 絶対遊んでるだろアイツら全員！」

朱里NA 【私も、はしたないのかな。遊んでんのかな】

ダンサーは客の男子と絡み、よりいやらしく踊る。

目が離せない女子たち。

朱里NA 【まあ、合コンばっかしてるしな。媚びてる自覚もあるし】

回想。小西とライン交換するとき、紙をかきあげて笑顔をつくっている。

朱里NA 【でも……遊びで寝たことなんて一度もないけどな】

ダンサー、踊りが終わり拍手喝采を受けている。

朱里NA 【経験数少ないし、そもそももう3年近く誰とも寝てないや。むしろ、爆睡されてるし】

回想。部屋で寝てる進吾のアップ。

朱里NA 【まあでも、友達泊めてる時点でアウトかな。よくわかんない……もやもやする】

顔を両手で覆う朱里。  
女子達はダンサーに拍手を送っている。

三好 「お」

同期C 「ん？ 朱里大丈夫？」

朱里 「酔った」

同期C 「もう帰る？」

そして次のスポットライトから次のダンサーが現れる。

三好 「Saiiちゃん登場！」

Saii、まばゆい光の中で、妖しいポーズを決める。

朱里NA 【いつそ……ここまで開き直れたらすがすがしいのにな】

同期B 「おっスリム！」

三好 「Saiiちゃんは食べても太れない体質なんだよネー」

しなやかに踊る Saii。

三好 「でも手足長くてタツパもあって、エキゾチックで綺麗でしょ。女性はただそこに存在するだけで、皆美しい……」

同期A 「オジさんチャライっすねー」

Saii、男子の客に自分のスカーフを巻いてあげたりして受けている。

その流れで落ちこみ気味の朱里にもスカーフをかける。

Saii、朱里の顎をクイツとやって妖艶な表情をつくろうとして……

Saii 「(くっ)気(く)」

朱里 「……(ハッと気づく)」

思わず逃げるように背中を向けて別の席へ移動する Saii。

朱里、その後ろ姿を見逃さない。

朱里NA 【腰！ 首から肩のライン……！！】

美脚！ あのヒップライン……！！】

○店の外、帰り道

朱里 「田中さん！」

帰り道、人目を避けるように帰る

Saiiの背中に声をかける。

ビクツと反応するSati(田中さん)。  
振り向いた顔は、ダンスが終わっているのに舞台メイク。

田中さん「……」

朱里 「……えーっ。メイク落とさずに帰るんだっ！全然わかんなかったですよー！舞台メイクすぎて、別人！」

田中さん「……ひっ……人違いです！」

朱里 「またまたあー！私が田中さんの体のライン見間違えるわけじゃないじゃないです！普通段どれだけ執拗に舐め回すように視姦してると思ってるんですかっ！」

田中さん「……っ！」

ダッシュで逃げる。

朱里 「あっ逃げたっ」

○翌日、朱里の会社、外觀

○同、廊下

朱里 「田中さーん！」

書類を持って手を振る朱里。

田中さん「(見つかった……)」

○女子トイレの表示板

○同、化粧鏡の前

田中さん、朱里に壁ドン。

朱里 「壁ドン……！(胸キュン)」

田中さん「誰にも言わないで！」

土下座。

田中さん「お願いします……！」

朱里 「えーっ……そんなに？ どうして？」

田中さん「(涙目で) 恥ずかしいからに決まってるじゃないですか！」

回想。昨日のエロティックダンス。

朱里 「まあ……わからんではないけど……でも、すっごいキレイだったのに」

田中さん「(顔が真っ赤に)」

思わず背を向けて走り出す。

その背中に声をかける朱里。

朱里 「会社の人には絶対誰にも言いませんから……！ また、観に行ってもいいですか？」

足を止める田中さん。

田中さん「……(顔が真っ赤に)」

再び逃げてゆく田中さん。

朱里 「どっち……？ イエス？ ノー？」

○夜、中東レストラン「サバラン」外観

○同、中

三好 「Satiちゃん？」

カウンターで一人飲む朱里。

三好 「違う違う、プロのダンサーじゃないよ。まだスクールの生徒さん。でも上手でしょ？」

朱里、モヒートのものを飲んで。

朱里 NA「ダンススクールとか行ってんだ……意外すぎる……」

壁に貼られた宣伝ポスター。

クリスマスショーのベリィダンス。

三好 「来月『クリスマスショー』があるんだよ。Satiちゃんも出演予定だから来てね」

○夜、朱里の部屋

そのチラシをベッドの上で見る朱里。

朱里 NA「勝手に行ったら怒るかなー」

× × ×  
回想、会社の廊下。

朱里 「あっ、田中さ……」

廊下ですれ違うたびに声をかけようとするが、田中さんに逃げられる。

× × ×  
朱里 NA「本人確認したいけど……避けられ

てる気もするし……】

枕に顔をうずめる朱里。

朱里NA【人が嫌がることわざわざするの  
もなあ……『ノー』とは言われなかった  
けど、でもなー……】

と、スマホが鳴る。ラインの着信。

小西からである。

クマが「ハイ！」と誘うスタンプ。

朱里NA【あ……こないだの合コンの……】  
ライン「なかなか予約の取れない店が取れた  
んだ。よかったら、どうかな？」「12月  
22日（木）20時くらいだけ」

朱里、冷静になろうとする。

朱里NA【絶対……こっちに行くべき。行く  
べき！】

返事を書く朱里。

ライン「わー（顔文字ハート）、素敵！ 楽  
しみにしてますね！」

朱里NA【田中さんに夢中になってる場合じ  
ゃない！】

○デート当日、夜の街

ライン「仕事早めに片づきそうなんだ」「よ  
かったら少し早めに待ち合わせしない？」

を見ているおしゃれた朱里。

やって来る小西。

小西「朱里ちゃん！」

朱里「（かわいく小さく手を振る）」

小西「てきとーにブラブラしよっか」

朱里「うん」

○デパート内のメガネ屋

でメガネをかけてみる小西。

ちよっと変で笑ってしまう二人。

小西「ごめんちよっとトイレ」

その隙にスマホをチェックする朱里。

朱里NA【あ、華ちゃんからきて……】

ライン「こないだの合コンだけどさー」

小西が帰ってくる。  
小西 「お待たせ」  
朱里、作り笑顔にもどる。

○デパート内の服屋のショーウィンドウ

ミニスカートのワンピース。

小西 「これかわいいーじゃん！ 朱里ちゃん絶対似合いそう」

朱里 「えーっ。さすがに短いですよー。もう23だし！ 10代じゃないんだから！」

インサート、笙野。

笙野 「(回想) みじかっ」

小西 「何言ってるんの！ 全っ然若いのに！」

歩きながら。

小西 「こないださー、すんげースカート短い女が歩いててキレイな脚してて」

インサート。

夜の街のミニスカートの後ろ姿。

思わず小西が前に回ると結構な年齢。

小西 「すれ違いざま思わず顔を見たら、ババアなの。ドン引き……朱里ちゃんはまだまだ全っ然大丈夫じゃんー」

朱里 「……あと、何年ですかね？」

小西 「え？」

朱里 「……私、17になった時、今が人生のピークだと思った」

回想。鏡で全身を見ている女子高生の朱里。

回想。女子高生朱里と友達が、男二人にナンパされる。

男 「えーマジ？ 女子こーせー？ ちょーかわいいんだけど！」

回想。20の誕生日のケーキ。

回想。街で(自分でない)女子高生をナンパしている男。

男 「えー女子こーせー？ ちょーかわいいーじゃん」

それを見る20の朱里。

朱里 「ヤバイ。うちらもうババアじゃんつて、皆で嘆いてて」

回想。いつもの友達とサイゼリアのよ  
うなファミレスでだべる。

イメージ。ミニスカートをはいている  
若い朱里の周りに群がる男たち。

それが、一人ずつ去ってゆき、誰もい  
なくなる。

朱里 「ちやほやしてくれる男性も、この先  
きつと、一人、また一人減っていく。……

誰もいなくなってしまう前に、『今』をフ  
ル活用しなきゃってずっと思ってる」

朱里 NA 【どっちも無理……みじめだもん】

朱里 「でも……」

小西、ドン引きしながら闇落ちしてい  
る朱里に声をかける。

小西 「あ……朱里ちゃん……？ どした  
ー？ 大丈夫？ オレ何かマズイこと言っ  
た？」

朱里 「いえそうではなくて。こないだトラ  
ンプさんがアメリカ大統領に決まったじゃ  
ないですかっ！」

小西 「えっ。もう何っいきなりっ！」

朱里 「政治のことはよくわかんないけど……  
……ヒラリーさんの敗北宣言はちよつとよく  
て」

× × ×  
回想。ヒラリーの敗北宣言の演説。  
ヒラリー 「Now, I know we have still not  
shattered that highest hardest glass  
ceiling. But someday, someone will, and  
hopefully sooner than we might think  
right now. And to all of the little girls  
who are watching this, never doubt that  
you are valuable and powerful and  
deserving of every chance and  
opportunity in the world to pursue and  
achieve your own dreams.

(訳) 私達はまだあの最も高く硬いガラス

の天井を打ち砕けてはいません。でもいつの日か誰かが成し遂げてくれるでしょう。きつと私達が思うよりも早く。そしてこれを見ている全ての少女達へ。あなた達には価値があり、力があり、あなたの夢を追い求め叶えるためにこの世のあらゆるチャンスが与えられていることを信じてください

× × ×  
朱里 「まー別に、それはどーでもいいんだけど！ でも『リスクヘッジ』とか私ちまちま何やってんだろなーとか、最近ちよつと思つてて」

小西 「え……演説終わり……？」

朱里 「(にっこり) ハイ」

小西 「じゃ……っ、じゃあそろそろお店に行こつか。とつと……」

朱里 「今日は行くのやめときます」

小西 「はあっ？」  
朱里 「さっき友達からラインが来たの」

華からのライン。

ライン 「こないだの合コンだけどさー」「朱里のことめっちゃ気に入ってた小西ってオッサンいたじゃん(顔)」「アイツ(むかつき文字)沙奈にも猛プッシュかけてるっぽい。明日デートだって」「一応、報告。気をつけれ」

小西 「ち……違うんだって……！ あれは……！ 朱里ちゃんがオレのことなんて相手にしてくれるわけないって思ってたから……！」

朱里 「わかります。大事ですよ、リスクヘッジ。私も、ほかにご飯食べに行ったりするヒトいますから。お互いさまで。その程度ですもん。お互い。じゃっ」

と去ろうとする朱里の袖を小西がつかむ。

小西 「朱里ちゃん……！」

朱里 「私、今無性に会いたい人がいるんです」

小西、ショックを受ける。  
朱里、走りだす。

○夜の街

走る朱里。

朱里NA【まだ間に合うかなー？】

回想。土下座して涙目の田中さん。

田中さん「誰にも言わないで！ 恥ずかしいからに決まってるじゃないですか！」

回想。小西。

小西「オレのことなんて相手にしてくれないわけないって思ってたから……！」

走る朱里。

朱里NA【なんで……皆、自分には大した価値がないって、すぐに思っちゃうんだろ。誰に吹きこまれたんだろう。思い当たるが多すぎて、もうどうでもいい】

○夜、表参道駅の地下入り口

○夜、中東レストラン「サバラン」外観

○クリスマスイベントのポスター

○店内

暗い店内に入って来る朱里。

三好、気づいて手を上げる。

三好「遅かったね。でもちやうどSaliちゃんの出番」

音楽が流れてくる。

美しく官能的に舞うSali（田中さん）。

それを魂を奪われるように眺める朱里。

朱里NA【論外。元々『普通』じゃない。粹外へ】

朱里、踊りにスタンディングオベーション。

朱里NA【『天井を打ち破る』なんて大層な野心は持ったこともなく、多分、私はほん

のちよっと脱線してみたくなっただんだ  
大盛り上がりな夜。

○光友銀行、外観

○同、オフィス

安いペンで書類を書いている笙野。

○L 「あれっ笙野さん。いつも使ってる  
ボールペンどうしたんですか？」

笙野 「あー……アレどっかに落としたっば  
くて」

○L 「えー。アレすてきだったのにー」

笙野 「(考える) 落としたのどこだっけ……  
」

○路上

スマホの画面を延々見る進吾。

進吾 「今日朱里ん家行っいい？」

朱里 「あ、ごめんー今日ムリ。」

進吾 「じゃー来週は？ 24日金。オレ次  
の日休みだし」

朱里 「24日は大切な用事があるの」「ム  
リ。」

イラっっている進吾。

進吾 「……」

○店内のポスター

再びベリーダンスのイベント告知。

「24日」の日付。

店内のおいしそうな中東料理。

○夜、「サバラン」の帰り道

ほっかむりを被って舞台メイクのまま  
の田中さん、ぎよっとする。

田中さん 「あなたまた来たの……？」

朱里 「(ニコニコの顔)」

田中さん「ス……ストーカー……？」

朱里「ただのファンですよ」

朱里NA「とりあえず、田中さんに会えると、

私はとても楽しい」

星空がまたたく。

ドン引きする田中さん。ぷくーつとむくれる朱里。